

ひがしひろしま 郷土史研究会ニュース

No.615

2025年11月

第53回郷土史展を終えて

実行委員長 今田 幸博

令和7年度（2025）の郷土史展は「戦争と平和―被爆80年をへて」をテーマに、10月15日（水）～20日（月）までの6日間、東広島芸術文化ホール「くらら」の市民ギャラリーで開催。636名の来場者がありました。

今年は戦後80年、被爆80年の節目の年にあたり、郷土史研究会としても、東広島から見た戦争と平和について、広く市民の皆様に知ってもらうと共に、平和について考えてもらえればと企画しました。



展示方法として、3つのコーナーを設けました。

①戦争の軌跡

戦争に至った経緯、戦争被害と加害、戦争を終えることの難しさ等を詳細に解説するとともに、戦前（昭和10年代）の国の教育方針等について知ってもらうため、当時の教科書等を展示しました。また、当時（戦前・戦中）の世相を知ってもらうため、東広島の古写真、戦争遺跡（川上弾薬庫・原村演習場ほか）についても展示しました。

②原爆と東広島

原子爆弾の開発から投下までを時系列で、原爆の被害についても展示すると共に、東広島から救援に向かった「陸軍賀北部隊」や「傷痍軍人広島療養所（現在：東広島医療センター）」における治療状況等を詳細に展示しました。

11月例会のご案内

日時 11月22日（土）13：30～
場所 市役所北館 市民協働センター
発表 満洲移民の歴史と記憶
～歴史の「伝承」考

河本尚枝氏

また、このコーナーでは、県立賀茂高等学校の協力を得て「次世代へつなぐ賀茂高等学校の取り組み」や関連資料を展示して頂きました。開催中の19日午後には3名の現役生徒による展示解説も行っていました。

若い人も平和について、真剣に取り組んでいる姿を見ると感動しました。

③戦後80年平和への歩み―戦後から現代に至る平和活動について

80年前（戦前と戦後）に日本はどのように変わったのかを解りやすく展示すると共に、戦後の世界の動き、今も続く紛争、核兵器の状況等についても展示しました。東広島の平和への取り組みについて「東広島平和学習バス」の40年の歩みを詳細に展示すると共に、東広島市の平和への取り組み「平和・非核兵器都市東広島市宣言」等についても展示しました。

最後に「あなたの“平和へのおもい”」を書いてもらうコーナーと折鶴のコーナーを設け、来場者の皆様に協力してもらいました。

今回の展示会は、平和とは何かを考える上で大変有意義だったと思います。

臨地例会（三原市本郷町）報告

大森美寿枝

日時：令和7年9月27日（土）午前8時半集合
見学地：三原市本郷町

コース：鏡山第二駐車場→中央公園前バス停→西条IC→小谷サービスエリア→本郷IC→佛通寺・（昼食）→西国街道本郷宿→米山寺→中公園前バス停→鏡山第二駐車場（解散）

秋雨を心配しましたが、丁度よい曇り空の中を予定どおり鏡山第二駐車場から出発。この度も「東広島市社会福祉協議会」のマイクロバスを利用させていただき、参加者23名で小早川氏ゆかりの三原市本郷町の佛通寺を研修し、途中本郷宿を散策後、代々の小早川氏が眠る米山寺を研修しました。近隣の地なので一度は訪れた方も多いと思いますが再度のお参りで新たな発見があったのではないのでしょうか。

マイクロバスは本郷I.Cを出て本郷生涯学習センター前で参加者1名と合流し本郷駅前を通り佛通寺道を進みます。佛通寺川の清流に沿って白馬渡しの橋を渡り、巨大な絶壁の前を右に曲がると駐車場で神田宗務総長が境内説明のた

めすでに待機しておられ、出迎えを受けました。大本山佛通寺を取り仕切られている方の説明なので緊張していたが、ユーモアに現在の社会情勢も混ぜながら、とても解りやすくてたつぷりと約2時間にわたり説明をして下さり、時の経つのも忘れてしまうほどでありました。

■佛通寺

宗派：臨済宗佛通寺派 寺格：大本山
山号：御許山（おもとさん） 本尊：釈迦如来
札所：中国33観音霊場12番札所他
創建：応永4年(1397) 開基：小早川春平
開山：愚中周及（ぐちゅうしゅうきゅう）
諡号（しごう）（佛徳大通禪師）
即休契了（しっきゅうけいりょう）/勸請開山
中国元の国、金山寺の僧/愚中周及の師
佛通寺の名は即休契了の諡号「佛通禪師」による

由緒：沼田庄地頭小早川春平（はるひら）は京都で足利将軍家に奉公衆として仕えており、その頃「愚中周及」の名声を聞き及び応永4年(1397)8月九州へ行脚に向かう師を本郷に招き同年10月師を開山として一寺を創建する。春平は氏寺を建立することで南北朝の動乱のさなか自立性を強めてきた一族の結束を図ろうとした。

佛通寺の名は「愚中周及」の師である中国元の金山寺の「即休契了」を勸請開山とし、その諡号「佛通禪師」からとられており、師の最も気に入った山水絶佳の地を選んで（中国の虎溪に似た景勝とも言われた）春平の権勢と資材により建立された。足利将軍家の祈願所となり、「祈願護国禪寺」と称され小早川一族の帰依を受けて寺勢は隆盛し、最盛期には塔頭（たちゅう）本寺の境内に建てられた寺院、88ヶ寺末寺約3000ヶ寺に及ぶ広大な規模を誇っていた。しかし、応仁乱後数度の戦乱に遭い寺領を押収され、また火災に遭遇するなどで荒廃し、小早川隆景の治世にやや盛り返すも、関ヶ原後福島氏による寺領没収などで危機に立たされる。その後広島藩主浅野氏の外護のもと、代々改築修理が行われたが、寛政8年（1796）に火災に遭い堂宇の殆どを失う。文化文政年間（1804～1830）に浅野氏の支援により再築される。

＊浅野家の家紋「違い鷹の羽」が山門に使われており支援と関わりが深いことを示している。

明治初年、廃仏毀釈で寺領没収により苦境が続く。

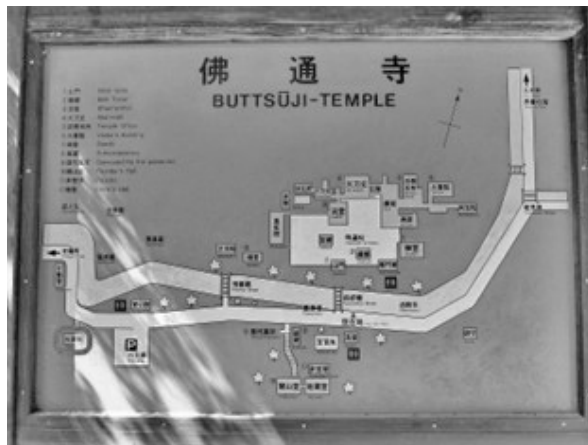
明治9年（1876）天龍寺の末寺となり、明治38年（1905）に天龍寺と熟談の



（浅野家の家紋）

うえ分離し、臨済宗佛通寺派を称しその大本山となる。

京都以西で唯一の臨済宗の大本山として、法灯は大いに挽回され、現在も数多くの文化遺産が伝えられている。



（佛通寺境内案内図）

①永徳院（ようとくいん）の石垣にある「出船・入船」

入口にある永徳院は山内の塔頭5院の一の寺（永徳院・正法印・肯心院・長松院・両足院）

境内に雪舟作と伝わる庭園があるが現在は非公開。中央に階段があり右側2段目の高さで石垣に帆先が永徳院の門に向いて組まれている「入船」、お参りの人（宝）が説法を聴きに。そして車道に面した左側の石垣に組まれた「出船」はお参りした人達が幽邃（ゆうすい）な山気が漂うなかで、示された光明を胸（宝）に佛通寺を後に。（神田宗務総長の談から）

②岸壁の「尊皇」

佛通寺塔頭、肯心院の側を流れる佛通寺川（活龍水）を挟んだ対岸の猛虎巖（もうこいわ）上の垂直な岸壁に一文字4m角で「尊皇」



と彫られている。工事中突然の雨の際に石工の人達が彫った溝の中に避難できたくらい深く文字が彫られているようである。

日中戦争の最中、昭和12年（1937）9月14日（88年前）未明、北支（山西省）閻山陣地の頂上の戦場で敵陣に突撃し、銃弾と手榴弾を浴びながらも軍刀を杖として皇居に向かって挙手敬礼し立ったまま絶命、つまり立亡（りゅうぼう）を遂げた旧日本陸軍中佐「杉本五郎居士」（行年38歳）を偲び、菩提を弔うため岸壁に彫られた。禅では「坐脱立亡」（ざだつりゅうぼう）が一番立派な最期だと言われている。杉本五郎居士は海田の陸軍基地から毎週末欠かすことなく佛通寺へ8年近く通い続けたと言われる。昭

和12年（1937）出征する時に当時の**佛通寺管長山崎益洲老師**は自筆の「般若心経」一卷を与えて「陣中でも一日一回はお称えするように」と申され餞（はなむけ）とされたそうである。

杉本居士は戦地より、死の直前まで4人の息子たちに遺書として20通の手紙を送っており、戦死後その遺稿は同志により軍人精神を伝えるべく「大義」として平凡社から出版される。当時のベストセラーとして、軍人ばかりでなく一般にも愛読される。

戦後80年の期に訪れ「禅の修行で絶対無の境にいたからこそ、真実を直視することができた」杉本五郎居士の生涯を知り意義深いものを感じる。（神田宗務総長の談）

③溪聲の小径（けいせいのかみち）

参道の木々と川の水音が心地よい小径を総長の案内で進む。側には彼岸花が色を添えている。流れている川は活龍水と呼ばれ佛通寺の聖域と俗世間を分ける結界とされ、流れる水のうねりが龍のように見えるところからその名がつけられたとのこと。

小径を抜けると参道には石灯籠が並び、もみじの緑が美しい。その中にひと際大きな常夜燈が建っている。

④無尽燈（常夜燈に彫られた文字）

明治38年（1905）に大本山佛通寺と称した時法灯が消えないことを込めて彫られている。

常夜燈を過ぎて参道の右側に石段が見える。今回は200段近い石段を登ると時間を要するので取りやめとしたが、機会があれば訪れていただきたい場所である。

⑤開山堂・地藏堂・多宝塔

石段を上ると開山堂がある。開山の大通禪師（愚中周及禪師）とその師中国金山の佛通禪師（即休契了禪師）を勧請開山として祀っている。

内部には両禪師の木像坐像（県指定重要文化財）と石造宝篋印塔が安置されている。

開山堂に並んで**地藏堂**が建っている。応永13年（1406）建立で創建当時のまま残る建物は国指定重要文化財になっている。内部には地藏菩薩像が安置されている。

地藏堂脇には**多宝塔**の鮮やかな朱色が目にとまる。昭和初期の建築で軒周辺に反りを持たせた整った塔姿が特徴で近代の多宝塔として登録有形文化財になっている。山口玄洞氏の寄進によるものである。

地藏堂の側には六地藏がひっそりと並んでおり、素朴なたたずまいに往時が偲ばれ心が落ち着く場



所である。体調を整えて石段に挑戦していただきたい。

参道を進むと山門に通じる橋の側に**羅漢楨**（らかんまき）の巨樹があり、開山大通禪師お手植えと伝えられ県の天然記念物に指定されている。巨樹の側には半跏趺坐（はんかふざ）の地藏菩薩（台座に腰掛け左足を垂下させている状態）が参拝する人を見守っている。

茶堂（休みどころ）のそばにある庭園の池は「**崑崗池**」こんこういけと呼ばれ雪舟作と伝わる。池に架かる自然石の橋は池を大きく見せるため遠近法で奥の方に向かって細く造ってあるとのこと。池の側に立っている美しい顔の三安観音（みやすかんのん）（家安かれ・身安かれ・子安かれ）は山口玄洞氏寄進のもの。

庭の奥には種田山頭火が佛通寺を訪れた時に詠んだ歌碑がある。

「あけはなつや 満山のみどり」

長い参道を進みようやく本寺に通じる境内聖域の結界とされる活龍水（佛通寺川）に架かる橋まで着く。

⑥巨蟒橋（きょううきょう）

巨大な蟒蛇（うわばみ）、大蛇おろちを表し橋を渡ることによって心身とも清浄になると言われているが、不心得者が渡ろうとすると蟒蛇が現れて威嚇したという。活龍水に架かる屋根付き（鞘橋）の巨蟒橋は佛通寺を代表する景観である。水害の為度々再建されている。

⑦山門

橋を渡ると山門が見える。入口には禅宗寺院特有の戒壇石に「不許葷酒入山門」と漢文で彫られた石柱がある。葷酒（くんしゅ）（匂いの強い野菜や酒）を口にしたりは寺に入ることを許さずの意。山門の両脇の土堀（筋堀）は皇室勅許（ちよっきょ）の印の5本線が大本山の風格を表している。山門は寛政8年（1796）の火災に遭い文化年間（1804～1818）に広島藩主浅野氏の支援で再建されたもので墓股（かえるまた）には浅野氏と小早川氏両家紋が彫られている。

山門を抜けると熊手で美しく整えられた**枯山水の庭**が目に入り清々しい気持ちになる。神田総長の説明によると石と岩で7・5・3に配列をして瀬戸内海を表しているとのこと。この光景は見るだけで気持ちが静まり禅の世界を少しだけ味わうことができたのではと思う。

佛通寺の境内は七堂伽藍の構成で建物が配置されている。

⑧七堂伽藍

佛通寺を構成する七つの建物を総称し、仏殿・法堂（方丈）・僧堂（禅堂）・庫裏・浴司・東司・

山門のことをいう。

(1) 仏殿 佛通寺の中心の伽藍で須弥壇上に釈迦三尊像(釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩)を祀る。浅野家の支援で文化6年(1809)に再建され、天井の雲龍図は菅南山の筆、龍は仏法の守護神であり、火難除けの意もある。

屋根は本山にふさわしく二重になっている。

(2) 大方丈 佛通寺の本堂。儀式、法話説法の間。方丈とは元は一丈四方(3m×3m)の住職の居間であったものが後に伽藍として建てられるようになる。本尊は高村光雲工房の門派による作で十一面観音菩薩像。この場所は高台に建つ朱の多宝塔を借景に庭を眺められるビューポイントである。

参加者一同は神田宗務総長の法話を聴いた後、お参りをさせていただいたので心が穏やかになり禅の世界に?

(3) 禅堂 獅子窟と言い、第3代山崎管長の扁額が前門に掛けてある。昭和初期に山口玄洞氏の寄進で建てられている。台湾檜の良材を使って簡素ながらも細部の意匠も精緻な建物で、従来は修行僧の禅堂として使用されていたが現在は一般の座禅会として活用されている。

(4) 庫裏(くり) 宗務本所、寺務所、応接室、厨房、食堂などがある。

(5) 浴司 文字通りお風呂のこと。

(6) 東司 便所のこと。

(7) 山門 禅宗では三門ともいい、修行を始めてから死ぬまで必ず通ると言われる空門、無相門、無作門という三つの解脱の門を指すと言われる。佛通寺の正門。

⑨観音堂

仏殿の左側にある建物で十一面観音を祀る。佛通寺は中国・安芸の33観音霊場の札所になっている。内部には檀信徒の遺骨を納める納骨堂がある。

⑩手水舎(ちょうずや)

観音堂の前に造られており、龍が玉を持ち口からは神聖な水が出ている。龍の姿が細部まで精巧に造られている。手水鉢に刻まれている文字は「盥嗽」(かんそう)、手を洗い、口をすすぐことを意味する。

⑪羅漢庭

篤志者が先祖供養のため寄贈した五百羅漢。色々な表情やポーズをしていて変化に富んでおり圧巻な数で並んでいる。自分に似た羅漢さんがおられるかも…五百羅漢とは釈迦の500人の弟子たちで、それを模した石仏を指す。

昼食後に船越カメラマンによって羅漢さんの前で参加者全員による記念写真を撮っていただく。



神田宗務総長には約2時間にわたりたっぷりとお話をさせていただき参加者一同、佛通寺の魅力を十分堪能する。なんと、神田宗務総長は説明を終えると東広島の本郷宿へ葬儀の為に急いで出かけられたのである。

佛通寺では広い昼食会場を用意して下さり、ゆっくりと午前中の疲れをいやすながら食事をとることができ、佛通寺の清楚な風韻に浸る。

画聖雪舟の国宝6点の山水画のうち5点は佛通寺がモチーフになっていることを知り、奇観に富み四季を通じて趣があり、雪舟ならずとも心動かされる地である。

昼食を終えると佛通寺川を右に左に見ながら午後の研修地西国街道「本郷宿」へ向かう。

本郷生涯学習センターの駐車場で下車して旧山陽道を、郷土史石造物部会のリーダー船越氏と本郷が地元の神本氏の説明で散策を行った。

マイクロバスは本郷宿の東に向かい最後の説明場所の西念寺駐車場で待機している。

■西国街道(旧山陽道)本郷宿

本郷宿は西国街道のほぼ中間に位置し、本陣(御茶屋)のある宿場町として、また、沼田川の舟港として賑わったところであり、三次と外港であった忠海を結ぶ三次街道の中継点も兼ねた物流の要衝として大いに栄えていた。町には、代官所も置かれて多くの人々が往来をしていたと思われる。うだつのある町家や神社、お寺が並び、町の中央には江戸時代の水路が流れて当時の面影が残る貴重な史跡に出会える。

西條四日市～三原間の宿駅は当初「茅の市」に置かれていた。寛永10年(1633)頃御茶屋が設けられた本郷に移されたといわれる。

享保初年(1716)頃の「本郷村市」は長さ32間で家数は72軒であったが、その後、通行量の増加とともに、広島藩は町家の建設を奨励し沼田川のほとり(上市)～西念寺の(下市)手前までの西国街道沿いには町家が並び文政8年(1825)頃の家数は203軒といわれている。

①両面地藏

昭和に造られた水路の上に置かれ頭が二つあつ

て両方から拝むことができる地蔵が台上に座している。昭和の初め地元有志の初願で交通安全、悪病退散を祈って建立された。両方から拝むと二倍のご加護があると言われている。

②寂静寺

宗派：浄土真宗本願派

創建：天文18年（1549）

開基：祐圓 現住職は14代

11代住職は元勸学寮頭（最高の僧職）

門前に置かれている春日灯籠の中台のまわりに6匹の動物が刻まれている。

③澤田家住宅 「醤油醸造元」の大きな看板が掛けてある。明治時代の商家で当時は玄関に大きな大戸があり、荷車をそのまま家の中に引き入れるようになっていた。

*参加者は健脚ぞろい？なので沼田川のほとりまで行っちゃいました！

④上市地蔵 常夜燈の側に安置してある。江戸時代の天保年間（1830～1844）は疫病が流行り、飢饉による餓死者が多くあり、その人達の霊を供養するため本郷にあった尼寺の大安実梧尼は広く行脚して浄財を集め、地元の石工・弥助に石地蔵を造らせ、上市の大渡土手に安置し、村人あげて慰霊を兼ね慰安の祭を行った。

その後毎年7月の23夜は近郷の人々は田植えを終え骨休みを兼ね活気のある祭日となり、夜遅くまで賑わったといわれる。

昭和20年（1945）ごろ道路拡張に伴い現在の敷地に移動している（半伽趺坐の地蔵像）

⑤大渡りの大師堂 宿場町を旅する人々の安全を祈願するため200年前に建てられたものである。堂内は真言宗の開祖空海（弘法大師）を祀っている。

沼田川に渡し舟が出せない時は、大師堂に宿泊していたといわれ、西国街道を旅する人達には必要なお堂であったと思われる。

昭和初期にはお堂の周辺で「牛市」が開かれていて大変賑わっていたようである。

他に敷地内には、加藤清正が参拝したと伝わる「錦山神社」に本郷町の本通り商店主の有志が商売繁盛を祈願するために建てられたと伝わる「稻荷神社」、そして、昭和40年（1965）に建てられた「鳥獣慰霊碑」があり、上市のこの地が賑やかであったことが伺える。

⑥恵美須神社 永禄4年（1561）本郷の商人が発起して建立された神社。本郷には代官所が置かれており、恵美須神社辺りにあったと言われ、当時はこの付近が一番賑やかであったと思われる。この神社にはユニークな石造物がおかれている。

◇正面の鳥居の扁額

石鳥居に鯛が2匹寄り添った石造の扁額が掛かっている。

天保10年（1839）10月

◇手水鉢 精巧に鯛の姿が彫ってある。

◇狛犬 雄の狛犬は子供を頭上に置き、雌の狛犬は子供に乳を飲ませている。天保7年（1836）10月作。どれも尾道の石工弥助の作で精巧に造られている。

⑦道標

南面に「佛通寺道」佛通寺大本山を指す

西面に「稻荷道」久井稻荷神社を指す

文化6年（1809）の建立

三次と忠海を結ぶ三次街道の分岐点になっている。ここで船越氏よりクイズが出される。「頼山陽」は脱藩の時、この道標を見たでしょうか？さて正解は…

ヒント*脱藩は寛政12年（1800）の9月

⑧下市地蔵

JR 山陽本線の北側にあったものを何度か移動して現在地に安置されたといわれ、上市地蔵を発願し大渡りの土手に安置した大安実梧尼の尼寺に置かれていた地蔵と伝えられている。

天保6年（1835）11月石工は上市地蔵と同じ弥助の作である。片足を下ろした半伽趺坐（はんかふざ）の地蔵尊。台座には竹林の虎が彫られているが、あまり虎らしく見えないと口々に評価されるので石工の弥助さんは石の下で悔しがっているのではと思われる。

⑨西念寺 本郷宿の東のはずれにあって立派な山門が建つお寺である。マイクロバスを駐車させていただき、引き返さなくて済み大いに助かる。住職さんからもお寺の説明をしていただきご好意に感謝です。

宗派：浄土真宗本願寺派 慶長年間（1596～1615）に高山の東、余井から利便の良い現在地に移転したと伝わる。本堂は文化11年（1814）に建立され近隣在郷の門信徒により沼田川の川原から砂をモッコでかつぎ継いで嵩上げをし土台を作り上げたと言われている。その際の嵩上げで7年前の豪雨災害の時、お寺は無事であったと説明をされ門信徒の力は偉大と感じる。お寺の屋根の寺紋が珍しい紋なので尋ねると「蜂須賀正」(はちすかまんじ) と言い先祖は静岡といわれる。

本堂も開けていただいております、時間に余裕があればもう少しお話を聞きたいところでしたが次の研修地へ向け本郷宿を後にする。

(つづく)



第10回昔の道探訪会

赤木 達男

■城郭と軍港を兼ね備えた三原城（浮城）

9月24日、第10回「昔の道探訪会」に参加しました。久々の参加に加え小早川隆景が開いた三原城下なので、胸はずませ本線上に乗車。集合地のJR三原駅に降り立ち、16名の仲間とともに構内の通路を北側に抜け天守台跡に登る。



天守台跡に立ち、あらためてJRが三原城趾の中を走っていることを実感し、今更のように驚きました。1894年（明治27）6月10日、山陽鉄道糸崎～広島間の開通と同時に開業した三原駅。“なぜ、三原城ど真ん中の本丸跡に駅ができたのだろう”と疑問が湧きます。開業翌月に始まった“日清戦争の兵員輸送に間に合わせるため、国家的な要望で開業が急がれたことからなのか”とも察せられますが……分かりません。

東西に伸びる狭い平地に三原城が築かれたのは永禄10年（1567）と伝えられています。小早川水軍の拠点として三原湾に浮かぶ小島や中州をつなぎ築いた砦が原形とのことです。城郭兼軍港としての機能を持った三原城は、満潮時にはあたかも海に浮んだ城に見えることから浮城とも呼ばれたとのことです。

駅の南約200m先には国道2号線が東西に走っていますが、水域だったこの辺りが埋め立てられるのは明治以降のことのようです。

この画像は国立公文書館所蔵の「備後国之内三原城所絵図」です。天守台跡から南を望むと、



今日でも「浮城」と呼ばれていた所以が窺えます。

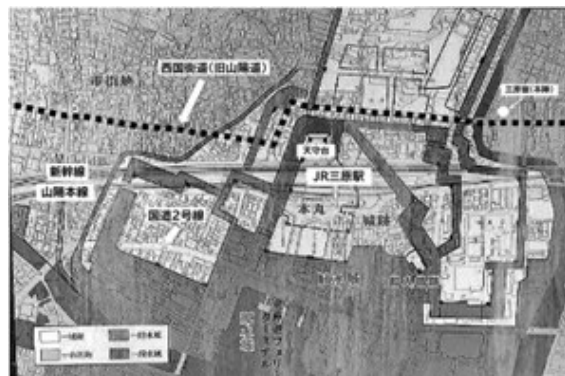
■城内を通っていた西国街道

天守台跡から北側に目を遣ると400m程先に備後桜山城跡が残る山麓が迫っています。その裾に8月に移転したばかりの三原市歴史民俗資料館が建っており、天守台跡のあと訪れました。

三原城南側城壁（石垣）の先は海、北側もかつて侍町のあったすぐ先には山裾が迫っています。“一体「昔の道」（西国街道）はどこを通っていたのか”と迷ってしまいます。

西国街道は三原城内を通っていたそうです。左下の「備後国之内三原城所絵図」を見ると分かります。東から下ってきた旅人は三原宿本陣を過ぎたあたりで三原城の東大手門をくぐり、天守台を囲む堀に沿って侍屋敷が立ち並ぶ侍町を抜け、西大手門から町家に入り次の本郷宿に向かっていったようです。

下図は三原市が作成した「三原城新旧対照図」に私が手を加えたものです。



■小早川氏探求を課題

続いて訪れた三原市歴史民俗資料館では、各展示ブースに沢山の学びをいただきました。中でも三原市教育委員会の学芸員さんの小早川隆景と三原城についてのお話は“目から鱗”。課題の一つ心しました。

小早川氏と言えば、毛利元就の三男・隆景が竹原小早川家に養子に入り、次いで沼田小早川との統一を成し、豊臣政権の5大老の一人として活躍した智将・小早川隆景のことぐらいいしかりませんでした。

断片的で不正確な知識しかないことにあらためて気づき、祖とされる土肥実平から隆景時代、江戸から明治維新までの小早川氏の変遷を辿ってみることにしました。

手掛けたばかりですが、私にとって中世の安芸国、とりわけ“戦国時代の東西条の歴史理解に欠かせない課題だなあ”と思い始めています。

久々に参加した秋日和の「昔の道探訪会」。蔵楽前会長と「たこ飯」に拘り、探し当て満喫できた「たこ料理」を含め、大満足でした。ありがとうございました。

安芸津・榊山八幡神社の絵馬 4

今田 幸博

《神楽殿の絵馬》

■26. 武者奮戦図(むしゃふんせんず)



縦：78.3cm×横：102.0cm

画は、剥落が著しく何が描かれているかはつきりしないが、二人の武者が戦っている構図のように見える。「安芸津風土記」第7号には「武者絵」と記されている。

明治2年(1869)己巳4月穀日に、久坂□□、井原富之輔が奉納。

■27. 繫馬図(つなぎうまず)



縦：71.8cm×横：141.5cm

画は、剥落が著しいが和鞍を装着し後ろ足を蹴り上げる躍動感のある黒馬を描いている。

画内に墨書があり判読すると「宝暦十三癸未五月吉日 内裏□休拝蹇 藤原□□筆」と記されている。

以上のことから、宝暦13年(1763)癸未5月吉日に奉納されているが、奉納者は不明。「内裏□休拝蹇」については、何を表しているか不明。

画工は、藤原□□である。

■28. 不明図(ふめいず)



縦：89.7cm×横：180.0cm

画が、描かれていたか或いは何か貼り付けられていたのではないかな？

現在は、下地の白紙だけになっている。

明治40年(1907)3月18日に、山中綱平、森下杭右門、山下□助、岡野□造、田坂□□郎、□□□勸松、木ノ下藤兵衛、南□八、佐久間仁作、山中柳兵衛、本庄儀助、林佐平、寺田才吉、本庄直平、新田山太郎、本庄保太郎、本□□右エ門、倉井□□、鹿□□□、□江政平、松尾□吉、橋本□助、加藤助松の23名が奉納。

《隨身門の絵馬》

■29. 勸進相撲番付表額(かんじんずもうばんつけひょうがく)



縦：82.5cm×横：54.5cm

昭和23年(1948)3月吉日に奉納されているので、同年2月か3月に当地(安芸津)で、開催された時の番付表と思われる。

勸進元は、山中彦太郎となっている。

【言葉の解説】

*勸進元(かんじんもと)：興行を計画し、世話をする人(発起人)。地方巡業の主催者のことを勸進元と呼ぶことが多い。

*以前は、現在と違い実力のない力士をいきなり上位に付出すなど、興行性が多分に重視されていた。

(例)：備後出身の「瀬戸錦」は、幕内力士ではないが、この番付表では「前頭」となっている。

■30. 観世流謡曲奉納額(かんぜりゅうようきょく ほうのうがく)



縦：30.0cm×横：79.8cm

額は、昭和57年（1982）1月吉日に、観世流の芸謡会が、「謡曲」を奉納した時の番組表である。

＜内容＞ 素謡

- 1 鶴亀（大橋清子・能島啓三）
- 2 朝長（河上かわ代・岸本泰昇・峠原勢津香）
- 3 井筒（下森 都・荒谷艶子）
- 4 葵上（下森 都・平野美佐子・峠原勢津香・本宮 積）

仕舞：高砂（平野美佐子）、班女（河上かわ代）

- 5 山姥（本宮 積・中光満子・能島啓三）
独吟：藤戸（河上威）、鉢木（五領田義剛）
祝言 を演じている。

【言葉の解説】

＊謡曲（ようきょく）：能楽（日本の伝統芸能で、式三番を含む能と狂言戸を包含する総称）の詞章（音楽的要素のある演劇作品の文章）。

＊観世流（かんぜりゅう）：能楽における流派の一つ。

＊素謡（すうたい）：能の謡の一形態。舞や囃子を入れず舞台上での動きはなく、謡だけの演奏方式。

＊仕舞（しまい）：囃子を伴わず、面も装束も付けずシテ一人が、謡だけを伴奏に能の特定の一部を舞うもの。

＊独吟（どくぎん）：謡の聞かせどころを、一人舞台に座って謡うこと。囃子を伴わない。

＊祝言（しゅうげん）：最後にめでたく結ぶために、添えられる祝儀の能のこと。

（終わり）

東広島市郷土史研究会連絡協議会豊栄町探訪会

東広島市郷土史研究会連絡協議会（市史協）は、第1回探訪会を豊栄町で開催します。ぜひお気軽にご参加ください。

日時：令和7年11月27日（木）13:00～16:00

場所：乃美地域センター 12:50集合

内容：乃美の大方物語、オオサンショウウオ見学、板鍋山、本宮八幡神社探訪

《新規会員紹介》

佐藤 琢哉さん（西条町）

空 克義さん（江田島市大柿町）

グループ研究会ご案内

第301回 古文書研究会

と き 11月18日（火）13:30～

ところ 市役所北館 市民協働センター

テキスト 国郡志御用ニ付下弾帳賀茂郡冠村④

第198回 石造物研究会

と き 11月24日（月）10:00～

ところ 竹林寺駐車場集合

内 容 第4回石造物探訪会 竹林寺臨地研修

第198回 四日市町並研究会

と き 11月12日（水）13:30～

ところ 西条本町歴史広場 小島屋土蔵

内 容 昭和の西条町商店街の歴史

昔の道探訪会（旧山城探訪会）

と き 11月12日（水）9:00～

集 合 白市観光駐車場

内 容 三景園の散策

原爆資料保存研究会

と き 11月20日（木）14:30～16:00

ところ 市役所北館 市民協働センター

内容未定

11月の図書室開放

と き 11月21日（金）13:00～15:00

ところ 高屋教育集会所

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース
第615号

令和7年（2025）11月5日発行
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男

事務局長 國松宏史

会報編集 進藤真由美